

新潟県域における複式炉の変遷

— 縄文中期の地域間交流と伝播経路の解明 —

The evolution of Fukusiki-ro hearth (multi-function hearth) in Niigata prefecture

— Unraveling regional interactions and the spread routes during the mid Jomon period —

中村 悠河 NAKAMURA Yuga

要 旨

複式炉は、縄文時代中期末葉に東北から北陸地方にかけて盛行した大型の屋内炉で、炉の構造は名前が示すように、複数の炉が一つに合わさったもの(それぞれ土器埋設部、石組部、前庭部と呼称する)が基本形である。「複式炉」の出現は縄文時代中期末葉を象徴する出来事であり、この「複式炉」を抜きにしては中期末葉の時期性を捉えることができない(阿部2008)と言われるほど地域的特色を語る上で重視されている。しかし、新潟県域の複式炉研究は2000年代に入ってから進展しているとは言えない状況にある。

そのため、最新の報告状況を踏まえ新潟県域の縄文中期中葉(大木8b式期)から縄文時代後期前葉(南三十稲場式期)までの炉を集成し、得られたデータから新潟県域の各時期の炉の構成比を示し、炉の変遷について検討していく。また集成により明らかになった、新潟県域における複式炉の伝播経路、特に東北系複式炉についても検討することで、複式炉を含めた炉研究の進展に寄与していくことを目的とする。

本稿では、集成した新潟県域の炉を割合によって検討し、炉の変遷をグラフで数値的な根拠として示すことができた。また新潟県域における東北系複式炉の伝播経路について3つのルートを示し、群馬県域、長野県域からの影響があることを示すことができた。

キーワード：東北系複式炉 構成比 祖型的複式炉 伝播経路

1. 複式炉研究の目的と意義

複式炉は縄文時代中期末葉に東北から北陸地方にかけて盛行した大型の屋内炉で、炉の構造は名前が示すように、複数の炉が一つに合わさったもの(それぞれ土器埋設部、石組部、前庭部と呼称する)が基本形である。新潟県では増子正三(1988)や田辺早苗(1988)により県内の複式炉研究の基礎が築かれ、その後、佐藤雅一(1990・1997・2000)や阿部昭典(1999・2000・2001・2002・2005)によって、複式炉の地域的特色と変遷が明らかにされ、阿部昭典・寺崎裕助・佐藤雅一(2005)が新潟県の複式炉研究の大枠を完成させた。

しかし、それ以降、新潟県域における複式炉研究は、2014年の阿部昭典の沖ノ原式期における複式炉の展開と集落構造の研究や2019年の複式炉付住居における屋内空間と儀礼行為の研究などはあるものの、進展しているといえない状況にある。また先行研究では、炉の形態についての検討が盛んになされてきたが、数値的な根拠に基づいて検討されて

こなかった背景がある。

そのため本稿では、最新の報告状況を踏まえ新潟県域の縄文中期中葉(大木8b式期)から縄文時代後期前葉(南三十稲場式期)までの炉を集成・再分類した上で、割合を用いて数値的な根拠を示していく。また集成により明らかになった、新潟県域における複式炉の伝播経路、特に東北系複式炉についても検討することで、複式炉を含めた炉研究の進展に寄与していくことを目的とする。

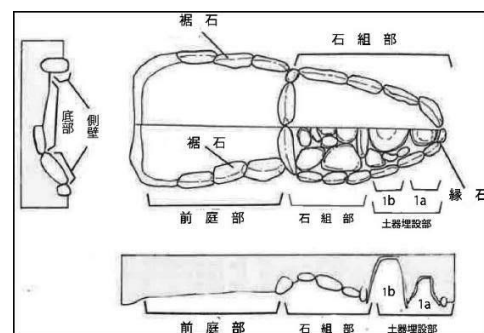


図1 複式炉部位名称(阿部2008を一部改訂)

2-1. 複式炉とは-研究者間での認識の確認-

複式炉とは、昭和32年に発掘調査された福島県伊達郡飯野町白山遺跡において検出された炉址に対し、後藤守一、梅宮茂によって命名された呼称である。梅宮は「複式炉の基本形は埋め炉と石組炉および前庭部の三つの構造がセットになって構成されている」(梅宮1972)と定義づけた。

複式炉は大きく分けて、東北地方南部を中心に展開した、前庭部が付設された「東北系複式炉」と、石組複式炉だけの「北陸系複式炉」に分類される(増子1988)。分布としては、前者は福島・宮城・山形県を中心に、北は秋田・岩手県、南は新潟・栃木県まで確認できる。後者は北陸地方、石川・富山・岐阜・新潟県に分布し、その地域独自に方形石組炉から発達したと考えられており、縄文時代中期中葉から後期初頭まで見られる(目黒1982)。これらの先行研究から、「東北系複式炉」と「北陸系複式炉」の両者が同時期に分布しているのは新潟県域のみといえる。

複式炉の出現・成立・衰退については、阿部の長年の研究によって明らかにされてきた。「複式炉の成立過程は、大木8b新段階～大木9式古段階にかけて、東北地方北部を中心に前庭部付石組炉が出現し、信濃川流域と福島県の一部に炉体土器を有する複式構造の石組炉が出現することから、これら両形態が大木9式古段階に融合して形成されるといったプロセスが考えられる」(阿部1999)と見解を述べた。出現に関しては、いくつかの見解があることを示したが、「長方形石組炉から土器埋設複式炉が出現する」といった解釈や、「前庭部付石組炉から複式炉が発生する」という解釈については賛同しているものの、「一つの地域もしくは一つの形態から複式炉が出現する」という解釈や、「福島県の事例を典型的形態として、他地域のものとはこれが退化したものである」という解釈には否定的であった(阿部2008)。また衰退期は、箱型化し、小型で簡素な形態を、この地域における複式炉の最終形態とした。その後、敷石が施される住居が出現するが、これらは分布圏内部での変化ではなく、外的要因、つまり関東・中部地方の柄鏡形敷石住居の影響によるものと考えられるとした(阿部2000)。阿部は、このように、複式炉が箱型化し、簡素化、小型化に伴って、この時期を境に、関東・中部地方の柄鏡形敷石住居の外的影響が複式炉分布圏に波及し、在地的要素と融合しつつ受容されていき、複式炉の消失へと至ったものと推定している。複式炉の出現から成立、衰退についての一連のプロセスは現在の複式炉研究では、一般的な考えになっている。小熊博史は、新潟県にお

ける縄文時代中期の住居跡を集成し、縄文時代中期を前葉・中葉・後葉の三区に分けて、上越・中越・下越のそれぞれの地方ごとの住居の特徴についてまとめた(小熊2003)。その中で、平面形態については「円系列」(円形・楕円形)と「方系列」(方形・長方形)の二つの系列が認められることを示した。炉跡の変遷では、前葉は地床炉、中葉は石組炉、後葉は複式炉を主として変遷すると述べ、それぞれ、石組炉の出現と複式炉の出現が炉形式の第一、第二の画期としている。

2-2. 複式炉の機能・用途

前提として、縄文時代の屋内炉の機能として、[1]食物の加工(肉・魚類を焼く、燻製、堅果類によるパン状食物の加工などの直接的加工と土器による煮沸等の間接的加工がある)、[2]冬季の暖房、[3]照明(炉以外の照明も考慮される)、[4]火に対する信仰施設、[5]火気保有による獣からの護身、[6]用具類作製のための熱加工などがあげられる(目黒1982)。

複式炉の機能・用途については、「土器埋設部と石囲部では火を焚き、前庭部では火を使用していない」(丹羽1971など)点で見解が一致しているが、各部の機能には諸説があり、それぞれ複合的な機能・用途を持っていた可能性が高いとの指摘がされている(鈴鹿1986)。渡辺誠は複式炉の土器埋設部について、燃焼部で生じた灰を一時的にプールする部分と想定し、その目的をパンやクッキーの焼成やトチの実のアク抜き用であることを指摘している(渡辺1984)。その他にも、目黒は石囲部のオキを移しての焼き肉・蒸し焼き(目黒1969)などを想定した。また堅果類を主原とする蒸し焼きによるパン状加工(目黒1975)などの考えがある。また石組部が20cm前後の深さを有することは、当該期の煮沸等の機能と関わる形状であると推測している(阿部2014)。また前庭部の機能では、薪の差し込み口(目黒1969)、石囲部への送風機能(目黒1975)、などがある。さらに、梅宮は田地岡遺跡の複式炉の例から、小型の精製土器を非実用の小型火壺として、神に対する共献用の火壺とし、さらに埋設土器炉は「火種」保存用にも供したものではないかと考えている(梅宮1974)。このように複式炉の構造、性格の中に、祭祀的、信仰を考慮しないと説明しきれない部分があると述べている。

2-3. 複式炉の定義の確認

複式炉の定義は、必ずしも一致しているわけではなく、研究者間でも見解にズレが生じている。丹羽茂は福島県の事

例から、複式炉を「石組複式炉」と「土器埋設複式炉」に区分し、後者を『上原型複式炉』と呼称し、「土器埋設石囲炉」と「敷石石組部」から構成され、他の複式炉とは区別した(丹羽1971)。また梅宮茂は、複式炉の基本形は(a)埋設土器、(b)石組炉、(c)前庭部の3要素がセットとなっているものを完成形態であると考えており、その中心を安達太良山麓と考えている(梅宮1974)。一方、阿部は複式炉の初源期の研究の中で、複式炉の定義を「土器埋設部・石組部・前庭部のいずれか2つ以上を合わせもつ炉形態・もしくは複式炉の系統上で捉えられる炉形態」とし、長方形石組炉の一端に小型石組炉を付属するような祖型的なものを「プレ複式炉」、東北地方北部を中心に分布する沢部型複式炉の類型を「前庭部付石組炉」と呼称している(阿部1999)。

このように複式炉研究の最初期の定義は、当初より事例が集中していた福島県内の事例から定義されたものであり、複式炉全体から定義されたものではない(阿部1999)。福島県域の研究者の定義を「狭義の複式炉」(阿部2014)とし、本稿では、阿部の前庭部付石組炉や前庭部を持たない複式構造炉も含めた、広義の定義としての「複式炉」を採用することとする。

3. 複式炉研究の歩み

増子は東北系複式炉を前庭部の有無によってA群とB群に大別し、部分的特徴から細分類した。この研究により、新潟県内の大木8b式期～大木10式期の東北系複式炉の変遷を示した(増子1988)。ほぼ同時期に田辺は、魚沼地方と北蒲原地方の土器埋設複式炉の分布・型態・変遷を明確にし、魚沼地方の土器埋設複式炉を越後的な特色の強いものであるとした。また2005年に阿部・寺崎・佐藤が新潟県を4つの地域に分けて、複式炉の様相をまとめた。また、時期区分として馬高式期後半から南三十稲場式期までを、1～8期に区分して、複式炉と住居形態の特色を概観した。この研究で下越地方の複式炉が東北南部の「上原型複式炉」と類似性が強いことを示し、これに対して、信濃川上流域の複式炉は地域色が強く、「沖ノ原型複式炉」の名称を提唱した(阿部・寺崎・佐藤2005)。

4. 分類の定義と分類方法

本稿では地域区分として、越後地域をⅠ：阿賀野川下流域の蒲原地方北部、Ⅱ：長岡市を中心とする信濃川中流域、

Ⅲ：信濃川上流域と魚野川流域、Ⅳ：それ以外の上越地方・佐渡地方を一括した地域の4地域にわけた(図2)。

時期区分として、阿部・寺崎・佐藤が設定した時期区分(2005)を採用し、1期：大木8b式古・中段階、馬高式期後半～栃倉式古段階、2期：大木8b式新段階、栃倉式新段階、3期：大木9式古段階、沖ノ原Ⅰ式古、4期：大木9式新段階、沖ノ原Ⅰ式新、5期：大木10式古段階、沖ノ原Ⅱ式古、6期：大木10式新(中・新)段階、沖ノ原Ⅱ式新、7期：沖ノ原式終末期(もしくは未命名)～三十稲場式期、8期：南三十稲場式期の8区分に分ける。

炉の分類の定義は、田辺の分類(1988)を採用し、新たに祖型的な複式炉をD類、小形石組炉をE類、長方形石組炉をF類、地床炉、埋甕炉などその他の炉をG類として設定した(図3)。

A類

A類は、平面形が箕形あるいは放物線形で、前庭部があるものである。

A-1：平面形は整った箕形で、前庭部は炉の側壁の延長線上へまっすぐのびる。石の敷き方は、石組部底面と側辺を分けて敷いている。

A-2：平面形は箕形あるいは放物線形で、前庭部は炉の側壁から外方へのびる。炉の周囲および石組部底面と壁の石の敷き方はA-1類と類似する。

A-3：平面形は放物線形で、前庭部はA-2類同様、やや外側へ開く。石は扁平石の平らな面を上にして、石組部底面と側辺を一続きに敷いている。

B類

B類は、平面形が箕形あるいはだるま形で、前庭部がないものが基本となる。石の敷き方は、石組部底面と側辺を分けて敷いており、底面に石を敷かないものも多い。

B-1：A-1・A-2類の前庭部のなくなったものといえる。大きさは100cmを超えるものが大半で、土器埋設部と石組部の間には明確な区画はない。

B-2：土器埋設部と石組部の間に大きな石の長側辺を上にして置き、明確に区画するものである。大きさは100cm前後とやや小ぶりになる。

C類

C類は、石組部を大きな石4個で正方形に囲うものである。前庭部はなく、大きさは小形になり、100cmを越えるものはない。土器埋設部の周辺には、土器に沿って小形の石を並べることが多い。

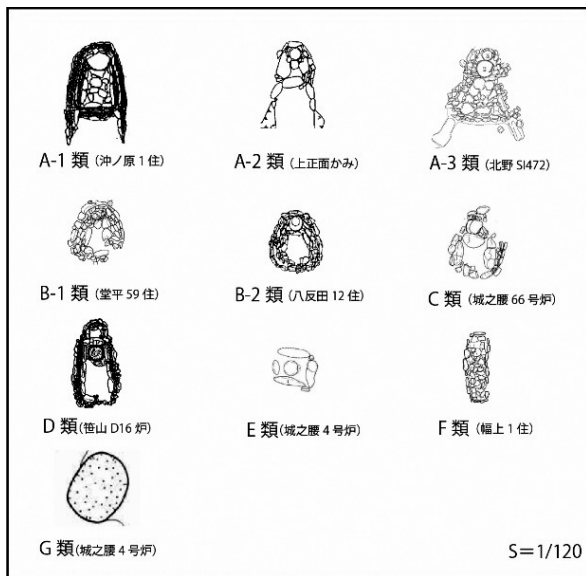


図3 炉分類表

D 類

D類は、先行研究で阿部(1999)が提唱した、「プレ複式炉」をここに入れる。長方形石組炉の一端に小型石組炉を付属するような祖型的なもので、炉石の組み方が「算盤状配石」と呼称されているものである。扁平石を二列に並べ、その間に小形礫を充填する「小礫充填手法」が使われているものである。この手法は、極めて地域色の強い組み方と言え、「沖ノ原型複式炉」(阿部・寺崎・佐藤2005)と呼称されている。また、扁平石を2~3列並行に配する組み方もあり、炉体土器が石組部の端部に埋設される例や端部と石組部の中央に埋設される例もある(阿部2008)。どちらの形態も大きさは100cmほどで、〔地域Ⅱ〕・〔地域Ⅲ〕の中越地方に分布が認められる。

E 類

E類は、正方形石組炉や円形石組炉など、小形の石組炉を一括し、ここに分類する。

F 類

F類は、長方形石組炉や楕円形(長楕円形)石組炉をここに分類する。長軸が150cm程度のものが基本形である。

G 類

G類は、地床炉や土器埋設炉など石組を伴わない、その他の炉を分類する。

5. 統計から見る時期ごとの変遷

ここからは、集成したデータを基に各時期の炉の構成比(図5)を出し、傾向を探っていく。今回は、良好な資料の多い、Ⅲ信濃川上流域と魚野川流域についてのみ傾向をまとめる。また、他の3地域については別の機会にまとめることとしたい。また住居平面については、小熊の「円系列」、「方系列」の定義を採用する(小熊2003)。

1期：F類が83%で、大部分を占めている。またE類が2%と少なく、この時期は比較的大形の長方形石組炉が主体的であることが分かる。またG類が9.5%であった。住居平面は、「円系列」が65%、「方系列」が35%と円系列が多い傾向にある。
2期：D類が35%、F類が34%、G類が31%であった。祖型的な複式炉であるD類が出現する。F類は1期に比べ、割合が急激に低くなり、G類は多くなる。住居平面は、「円系列」が92%、「方系列」が8%と円系列が圧倒的である。

3期：A-1類が5%、B-1類が15%、B-2類が5%、D類が4%、E類が3%、F類が37%、G類が17%であった。当時期は、様々な形態の炉が確認される時期である。2期に出現したD類は、数を減らしながらもかろうじて確認される。またA-1類、B-1類、B-2類が出現し始めるが、前庭部のないB類の方が、割合が高いことが分かる。住居平面は、「円系列」が57%、「方系列」が43%とやや円系列の方が多。

4期：当時期から複式炉の資料数が急激に増加する。A-1類が11%、A-2類が17%、A-3類が11%、B-1類が22%、B-2類が5%である。3期と比べると、A類が増え始め、前庭部が付く複式炉が多くなる傾向がある。またA類の中では、A-2類やA-3類の割合が多く、前庭部がハの字状になる傾向が認められる。住居平面は、「円系列」と「方系列」が半分の50%であった。

5期：A-2類が7%、B-1類が19%、B-2類が30%、C類が7%、E類が11%、F類が7%、G類が4%であった。当時期は、様々な炉形態が認められる。注目すべきはC類が出現したことである。またA類に比べB類が非常に多く、C類と合わせて、複式炉の前庭部が付かなくなる傾向にあるといえる。住居平面は、「円系列」が71%、「方系列」が29%と円系列が比較的多い。

6期：A-2類が3%、B-1類が3%、B-2類が4%、C類が32%、E類が29%、F類が7%、G類が11%であった。複式炉ではC類が最も多く、5期からの小形化・箱型化の傾向が継続する。また、複式炉の数が顕著に少なくなり、大部分が単

式炉に移り変わる。特に、E類の割合が最も多い。住居平面は、「円系列」が25%、「方系列」が75%と方系列が主体的になる。7期：当時期では、複式炉が認められなくなる。E類が37%、F類が13%、G類が29%であった。このことから、5期・6期から続いていた炉の小形化・箱型化の影響を受けて、炉が小形化し、単式炉のみになった時期といえる。住居平面は、「円系列」が67%、「方系列」が33%と円系列が主体的になる。8期：B-1類が4%、E類が34%、F類が8%、G類が46%であった。約半分近くが石組を持たない、G類である。しかし、7期で認められなくなった複式炉B-1類が認められた。また津南町下モ原Ⅲ遺跡4住の「二連石囲炉」や南魚沼市万條寺林遺跡11住など他の時期、他の地域では確認されなかった特殊な形態がみられることは、興味深い事象といえる。住居平面は、「円系列」が75%、「方系列」が25%と円系列が主体的である。

構成比から見る複式炉の変遷：各時期の炉の構成比を見比べながら、読み取れる傾向を述べていく(図5)。1期は長方形石組炉が主流であり、2期になると祖型的な複式炉が出現し、3期まで確認される。またこの時期は様々な形態の炉が確認されるが、前庭部が付かない複式炉の方が、割合が高いようである。4期になると複式炉が主体的になり、形態はバラエティに富むようになる。特に、前庭部が付くものが多くなる。5期になると小形の複式炉が出現しはじめる。また、前庭部が付かないものが大部分である。6期には5期からの小形化・箱型化の流れが顕著になる。また大部分が単式炉になることから、簡素化の流れが確認できる。E類が増える傾向も、小形・箱型化の流れが伺える。7期になると、複式炉は姿を消し、単式炉のみになる。8期は、大部分では単式炉のみになる傾向が確認されるが、一部、前庭部を持たない複式炉が認められる。また、特殊な形態の炉が確認される事象は興味深い。

住居平面の傾向として、1期から円系列が主体的であるが、4期にかけて方系列の割合が徐々に高まり、4期に半分にまでなる傾向が読み取れる。その後は、8期まで基本的には円系列が主体的であるが、6期のみ方系列の方が多くなる。

6. 原山遺跡「東北系複式炉」の伝播経路の検討

原山遺跡は上越市に位置し、「北陸系複式炉」のみが確認されていた〔地域Ⅳ〕で「東北系複式炉」と思われる炉が確認された唯一の事例である。しかし、同遺跡報告書には炉形態

について詳しい分析がされていない。そのため、炉形態や炉体土器を検討し、同遺跡検出炉を「東北系複式炉」と位置付けていきたい。また原山遺跡の事例から「東北系複式炉」の伝播経路を検討することで、他地域からの影響を明らかにしていく。

「東北系複式炉」と考えられる炉はSI6(炉1)とSI46である(図6)。SI6(炉1)は、A字状を呈し、大きさは長軸182cmほどである。石組部の縁石は扁平石を1列並べ、炉体土器の周囲は小形の石を並べて敷いている。炉体土器はA字の頂点に設置され、関東の加曾利EⅢ式に比定される。長岡市中道遺跡7住の炉はA字状を呈し、大きさは長軸160cmで、A字の頂点に炉体土器が設置される。また石組炉の縁石は扁平石を1～2列並べ、土器埋設部の周囲には小形の石を並べている。炉体土器は在地の粗製土器である。また時期についても、どちらも大木9式並行期である。これらのことから大きさや形態・時期については強い類似性があり、ほとんど同じといえる。

SI46は、祖型的な複式炉であると思われる。大きさは長軸136cmで、石組部縁石は扁平石を2列巡らせ、外側に小形礫を充填している。また土器埋設部は小形の石組炉が付設し、石組部と土器埋設部の間には大形の扁平石が置かれている。土器埋設部に土器は伴わず、石組部の土器埋設部寄りに設置されている。土器は中部高地の唐草文系土器である。中道遺跡46住は、長軸が135cmで扁平石を1～2列配し、石組部外側には小形礫を扁平石に沿って、充填させている。また土器埋設部に小形の石組炉が接続し、石組部と土器埋設部の間に大形の扁平石を1個置いて仕切りとしている。炉体土器は在地の粗製土器が、炉内中央や土器埋設部寄りに置かれている。

このように、原山遺跡SI6(炉1)、SI46の炉形態は、明らかに〔地域Ⅱ〕の炉と類似している。また同遺跡から信濃川流域の沖ノ原式土器が数点出土していること、炉の形態に類似性が認められることから、原山遺跡SI46(炉1)、SI46は〔地域Ⅱ〕の影響を大きく受けた「東北系複式炉」といえる。

さらに、炉形態や炉体土器型式から「東北系複式炉」の伝播経路を検討する。

前提として新潟県域では、〔地域Ⅰ〕に最も早く前庭部を有した祖型的な炉が出現することから、東北系複式炉は南東北太平洋側から会津盆地を経て日本海側に伝播したといえる。

1つ目のルートは、〔地域Ⅰ〕から〔地域Ⅱ〕を通り、〔地域

Ⅲ)を経て、〔地域Ⅳ〕に入るルートである。2期に〔地域Ⅰ〕に入った前庭部を有する複式炉の影響が、〔地域Ⅱ〕に伝播し、3期に〔地域Ⅱ〕の祖型的な複式炉と合わさって、A字状を呈する複式炉が生まれる。〔地域Ⅲ〕は2期の祖型的複式炉から、地域色の強い「小礫充填手法」が認められ、5期まで継続的に使われている。3期の沖ノ原遺跡1住は地域的な特色である「小礫充填手法」が用いられているが、A字状を呈していることから、〔地域Ⅱ〕で発生したA字状複式炉が信濃川を通じて、〔地域Ⅲ〕に伝播したと考えられる。その後、〔地域Ⅲ〕にまで広がったA字状複式炉が、山を越えて〔地域Ⅳ〕にまで伝わったと推測できる。

また炉体土器の型式では、原山遺跡SI6(炉1)が加曾利EⅢ式であることから、関東からの影響が伺える。群馬県域に近い〔地域Ⅲ〕から土器文化の影響があったと考えられるが、〔地域Ⅲ〕では、この時期に沖ノ原式が主体的であり、炉体土器に関東系の土器が用いられる例は、A字状複式炉では確認されていない。〔地域Ⅱ〕の4期では、A字状を呈した複式炉で、尚且つ、加曾利EⅡ式土器が炉体土器に使用されている例があり、原山遺跡SI6(炉1)と炉形態、土器型式からみても類似性が強いと考える。

以上のことを踏まえると、〔地域Ⅱ〕で祖型的複式炉と南東北の前庭部付複式炉が融合したことでA字状複式炉が誕生し、群馬県域からの関東系の土器の影響が〔地域Ⅲ〕を通過して新潟県域に入り、信濃川をつないで、それらが相互に影響しあうことで〔地域Ⅳ〕に関東系の土器を炉体土器に持つA字状複式炉が出現したと考える。

次に原山遺跡SI46の伝播経路を検討する。前述したように、原山遺跡SI46は、長方形石組炉の土器埋設部に扁平石を置いて、小形の石組炉としている祖型的な複式炉である。この形態の祖型的な複式炉は、信濃川流域〔地域Ⅱ〕、〔地域Ⅲ〕で認められる形態で、他の地域にはないものである。しかし、〔地域Ⅲ〕の祖型的な複式炉は、その地域独自の地域色の強い「小礫充填手法」で敷かれることがほとんどである。〔地域Ⅱ〕の祖型的な複式炉は、扁平石で構成された長方形石組炉に小形の石組炉が付設し、土器埋設部と石組炉の間に扁平石を置いて仕切りとしているもので、原山遺跡SI46住と類似性が強いといえる。これらのことから〔地域Ⅲ〕ではなく、〔地域Ⅱ〕の炉形態の影響が強いと考えられる。

また原山遺跡SI46の炉体土器は、中部高地の唐草文系土器である。唐草文系土器は〔地域Ⅳ〕には、地理的要因から出土例が多い土器である。しかし〔地域Ⅱ〕・〔地域Ⅲ〕では、祖

型的な複式炉が出現する、2期に、炉体土器に唐草文系土器を用いている例はなく、3期に、〔地域Ⅲ〕の堂平遺跡50住でのみ確認されている。

以上のことを踏まえ考察すると、原山遺跡SI46の祖型的複式炉の伝播経路は2つ考えられる。1つ目は、〔地域Ⅱ〕で出現した、祖型的な複式炉が、信濃川を通じて〔地域Ⅲ〕に伝播し、中部高地から〔地域Ⅲ〕に入り込んだ唐草文系土器の影響と融合し、〔地域Ⅳ〕に伝播したルートである。2つ目は、〔地域Ⅱ〕で出現した、祖型的な複式炉が、日本海を通る「海路」あるいは、山を越える「陸路」のいずれかで直接伝わり、中部高地と地理的に近いために唐草文系土器が多く出土する〔地域Ⅳ〕で炉と土器が融合することで、〔地域Ⅳ〕に唐草文系土器を炉体土器とする、祖型的複式炉が出現すると考えられる。

7. おわりに

本稿は、新潟県域の縄文時代中期中葉から後期前葉までの炉を集成・分類し、各時期の構成比を示し、傾向を検討してきた。分析結果は、ほとんどが阿部・寺崎・佐藤(2005)の変遷観と合致しているが、今回、グラフを用いて数値的な根拠を示すことができたことは非常に大きな成果といえる。また新出資料である、原山遺跡の炉について、〔地域Ⅱ〕の炉形態と比べ、類似していることを示し、「東北系複式炉」だと位置づけ、炉形態と炉体土器を検討することで、新潟県域の複式炉の3つの伝播経路を提示することができた。またこの検討により、新潟県域の複式炉には2つの画期が認められることが分かった。1つは、先行研究でも明らかにされていた(阿部2008)、2期に福島県を中心とする南東北から影響を受け、〔地域Ⅰ〕で前庭部付石組炉が出現することである。第2の画期として、3期に〔地域Ⅱ〕で祖型的複式炉に前庭部が付属したA字状複式炉が出現すると同時に、炉体土器に群馬県域、長野県域からの土器の影響を受けた炉が出現するということである。この研究で、新潟県域だけで検討されてきた複式炉研究が、他地域、特に関東地方との影響を捉える際に重要な見解を明らかにすることができた。

〈参考文献一覧〉

- 阿部昭典1998b「縄文時代の卵形住居跡-信濃川上流域を中心として-」『新潟考古学談話会会報第19号』 pp.35-49
- 阿部昭典1999「複式炉の研究-複式炉の成立について-」『新潟考古学談話会会報20号』 pp.40-60
- 阿部昭典2000「縄文時代中期末葉～後期前葉の変動-複式炉を有する住居の消失と柄鏡形敷石住居の波及-」『物質文化69号』 pp.1-39
- 阿部昭典2005「第6章3節信濃川流域の縄文時代中・後期の住居形態について」『道尻手遺跡』津南町教育委員会
- 阿部・寺崎・佐藤2005「新潟県における複式炉の様相」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会 pp.151-166
- 阿部昭典2008「縄文時代の社会変動論」アム・プロモーション
- 阿部昭典2014「越後地域における縄文時代中期末葉の複式炉の展開と集落構造」『沖ノ原式期の文化様相-縄文時代中期末葉の越後を語る-』新潟県・津南町教育委員会 信濃川火焰街道連携協議会 pp.86-120
- 阿部昭典2019「屋内儀礼-複式炉付住居における屋内空間と儀礼行為の復元-」『季刊考古学第148号』号雄山閣 pp.65-73
- 梅宮茂1972「田地ヶ岡遺跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査概報3』福島県教育委員会
- 梅宮茂1974「複式炉文化論」『福島考古 第15号』福島考古学会
- 小熊博史2003「新潟県における縄文時代中期の住居跡-その特徴と変遷-」『新潟県の縄文集落』新潟県考古学談話会 pp.28-48
- 押山雄山2005「複式炉研究のあゆみ」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会 pp.7-12
- 「シンポジウム 新潟県の縄文集落」実行委員会2003『新潟県の縄文集落-中期前葉から中葉を中心に- 第1分冊』新潟県考古学会
- 「シンポジウム 新潟県の縄文集落」実行委員会2003『新潟県の縄文集落-中期前葉から中葉を中心に- 第2分冊』新潟県考古学会
- 鈴鹿良一1986「複式炉と敷石住居跡」『福島の研究第1巻』精文堂出版株式会社
- 田辺早苗1988「新潟県の複式炉-魚沼地方を中心として-」『新潟県考古学談話会会報 第1号』新潟県考古学談話会 pp.18-22
- 丹羽茂1971「縄文時代における中期社会の崩落と後期社会の成立に関する詩論」『研究紀要 第1冊』福島大学考古学研究会
- 増子正三1988「新潟県における東北系複式炉について」『北越考古学』創刊号 pp.24-34
- 目黒吉明1982「住居の炉」『縄文文化の研究第8号』雄山閣 pp.147-166

渡辺誠1984「第6章 総括」『八反田遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会

※本稿では、紙面の制約により資料として取り上げた遺跡の調査報告書の出典については、本文及び参考文献より割愛した。ご了承いただきたい。

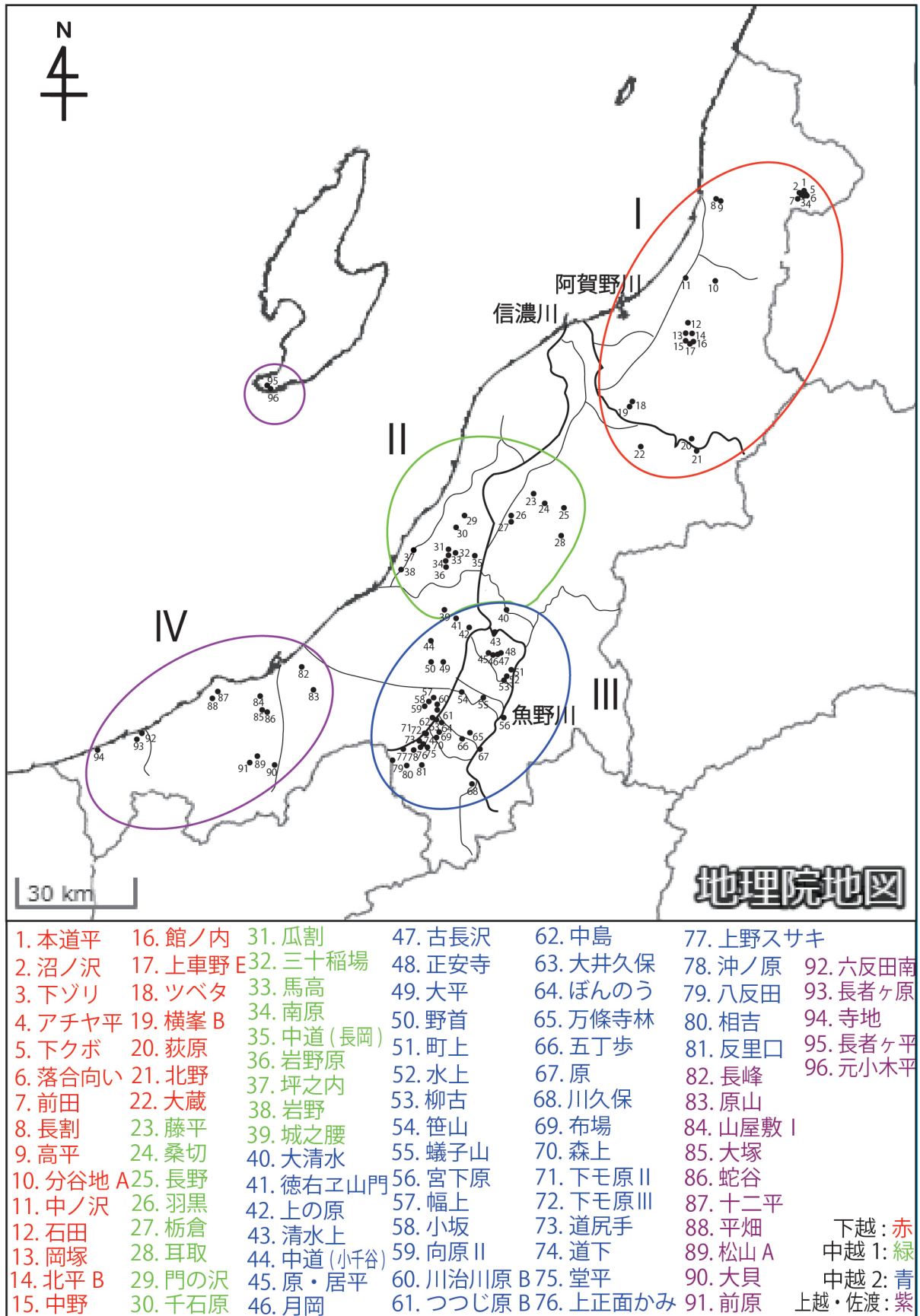


図2 新潟県域炉分布図









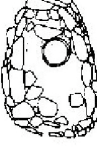

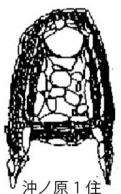









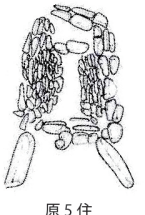








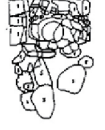



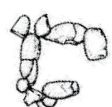


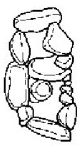
1 期	 万條寺林 4 住	 幅上 1 住居跡	 道尻手 30 住	 原居平 20 住	 笹山 JP1 炉	
2 期	 堂平 48 号住	 笹山 D14 炉	 笹山 D16 炉	 沖ノ原 2 住	 堂平 18 住	
3 期	 沖ノ原 1 住	 堂平 23 住	 原 10 住	 五丁歩 1 住	 森上 25 住	 中島 6 住
4 期	 野首 SI11 住	 万條寺林 36 住	 川久保 SI37	 上正面かみ	 原 5 住	
5 期	 堂平 59 住	 八反田 12 住	 笹山 E 区 1 号	 堂平 15 住		
6 期	 道尻手 21 住	 上野スサキ 9C 住	 上野スサキ 12 住	 川久保 SI176		
7 期	 反里口石囲埋糞炉	 反里口方形石囲埋糞炉	 八反田 9 住	 中島 1 炉		
8 期	 原 37 住	 原 35 住	 万條寺林 11 住	 下モ原 III 4 住		

図4 地域Ⅲ 複式炉変遷図

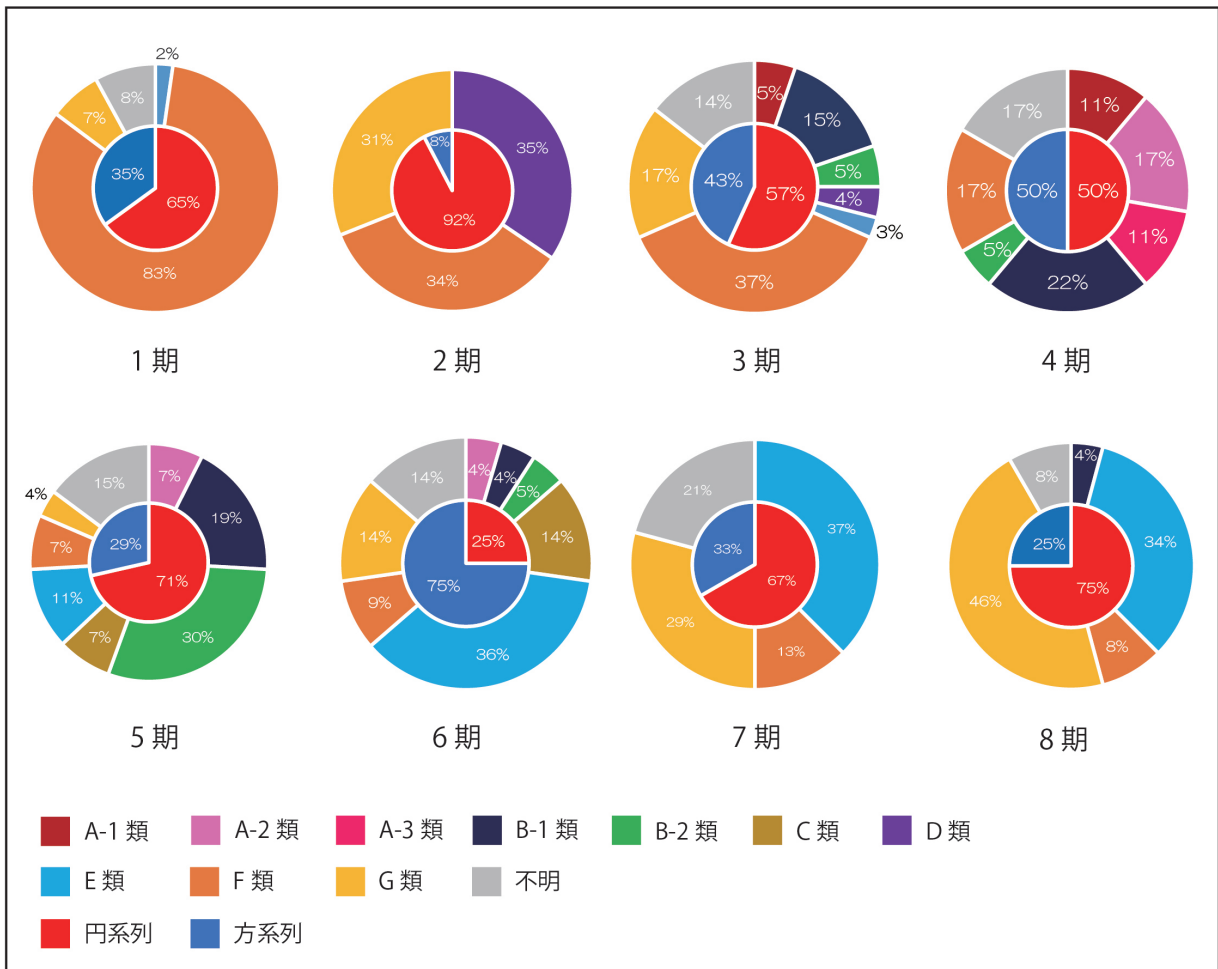


図5 地域Ⅲにおける各時期の炉構成比

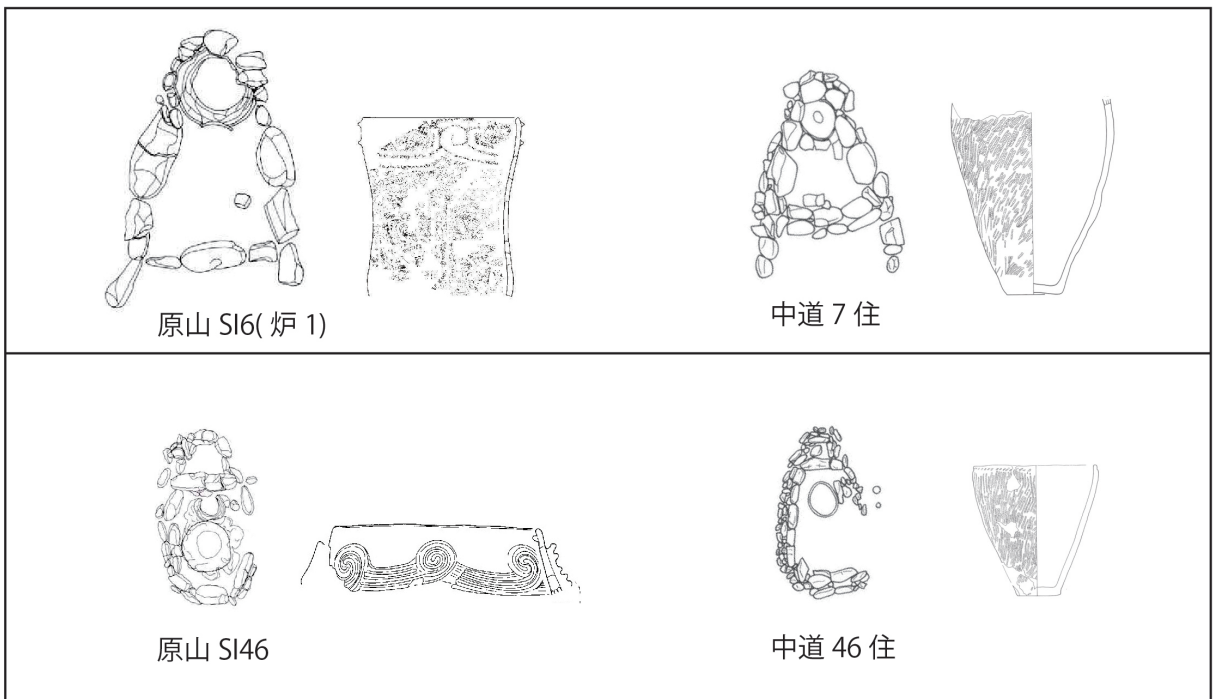


図6 原山遺跡炉比較図 炉=S1/50 土器S=1/6 原山SI6 土器S=1/12